

国指定史跡長登銅山跡調査速報

一解読成功!? 木簡から新たな発見！－



1. はじめに

みゆみとう ながのぼり
美祢市美東町に所在する国指定史跡長登銅山跡は古代から近代まで断続的に銅生産が行われた遺跡であることが判明しています。平成元（1989）年から平成10（1998）年に発掘調査が実施され、大切地区において奈良・平安時代（8～9世紀）の銅生産に関する遺構・遺物が確認されました。平成15（2003）年には国の史跡に指定されました。

美祢市は、この長登銅山跡をさらに観光・教育に活用するため、整備を計画しています。この整備計画策定の基礎情報となる、古代長登銅山の空間構造の把握を主目的として、発掘調査を平成27（2015）年より実施しました。

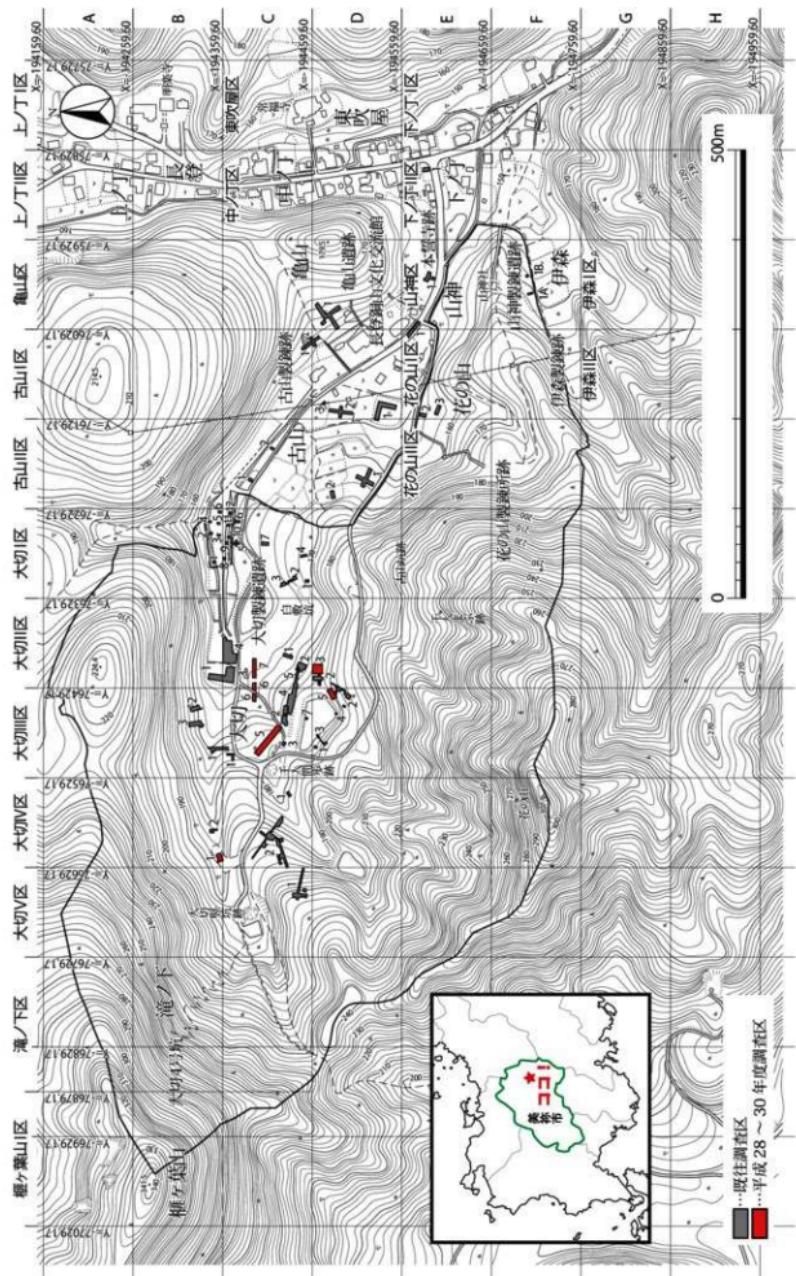
この企画展ではその主な調査成果の速報を行います。調査成果や出土遺物から当時の銅生産に関与した人々の社会・生活について考え、私たちの町・美祢にある長登銅山跡の魅力を再発見していただければ幸甚に存じます。

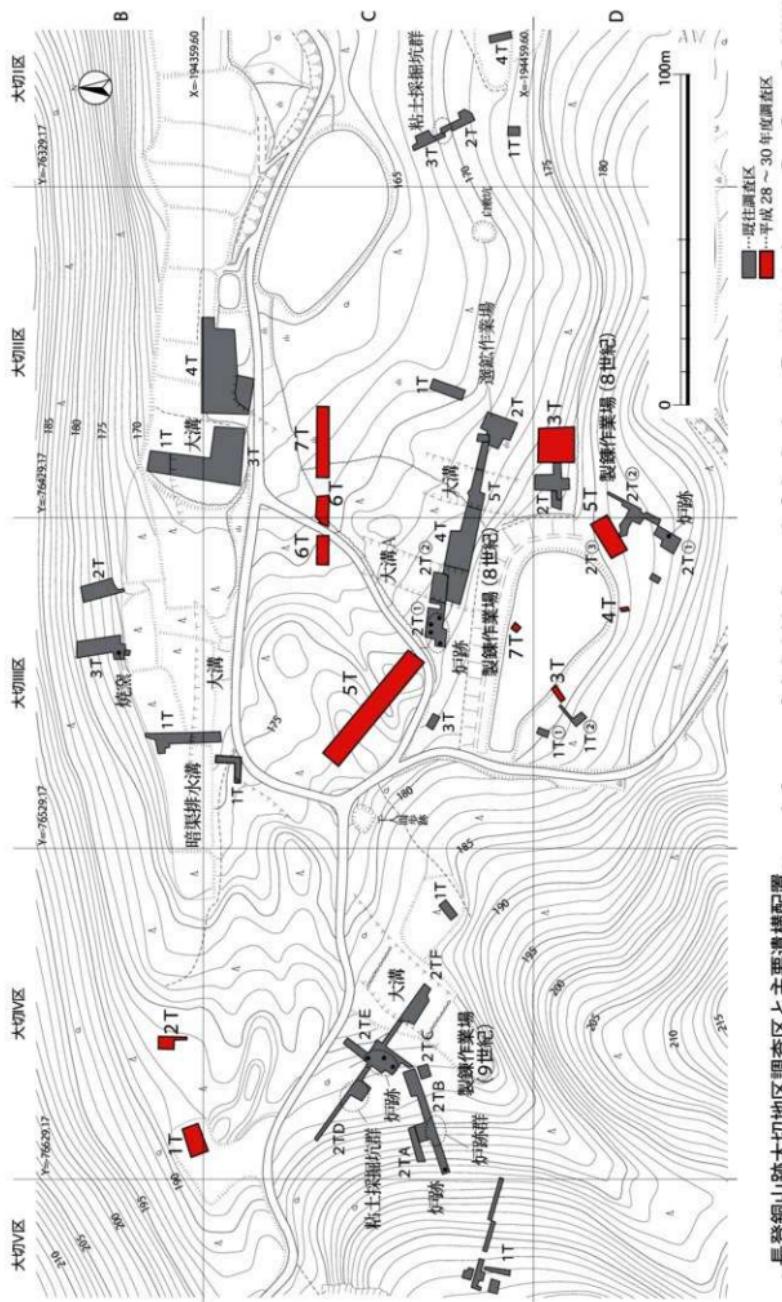
2. 遺構からみる長登銅山跡

長登銅山跡は古代から近代まで断続的に銅生産が行われた遺跡です。そういった活動の痕跡は現在の地形にも現れています。大切III C区5Tでは、2個の連続する小山を調査しました。これは現地形の成因などを確認する調査です。その結果、写真のように、近世の鉱山活動に由来するズリ山の上に、近代以降の土木工事に由来する砂山が堆積している状況が判明しました。

大切III D区5Tは古代の長登銅山を管理する建物跡を探す調査です。その結果、古代の柱穴列を検出しました。大きさ約0.8mの柱穴3個が南北方向に並んでいる遺構です。この遺構が建物なのか、遮蔽施設などの柵列なのか、は定かではありません。銅製鍊関連遺物が出土することから、作業に関連する施設の一部と想定されます。







以上のように、今回の調査では長登銅山跡における各時代のさまざまな遺構を検出し、古代から近代まで銅生産が行われたことを追認する結果となりました。

3. 大溝の下流はどうなっていた？

長登銅山跡の特徴的な遺構に大溝があります。この大溝は自然流路に近いもので、古代の遺物を含みます。特に大切ⅢC区2・4Tで検出された大溝Aは明確に人為的に掘削され、古代の遺物を多く含んでいます。その機能は、水をかわすだけでなく、製錬作業に利用する水溜や、区画の意図があったかもしれません。この大溝Aの実態を探るため、下流に位置する箇所を発掘調査しました（大切ⅡC区6・7T、大切ⅢC区6T）。



大切ⅡC区6T南壁土層断面
(北東より)

その結果、古代の遺物が多く出土しましたが、明確に掘削された痕跡は検出できませんでした。大溝Aは下流では浅く、広くなっていたと考えられます。古代、この調査区付近は周囲の大溝から水が集中する湿地帯的景観で、活動の中心はさらに標高の高い箇所であったと思われます。そして、この調査が新発見につながりました。

4. 解読成功!? 木簡から新たな発見！

長登銅山跡からは多くの木簡が出土します。木簡とは、古代の役人が板状の木に墨で書いた文書記録です。これまでの調査で、829点もの木簡が出土しています。

今回の調査でも大溝Aの下流から木簡が2点出土しました。1点は文字が解読できませんでしたが、もう1点は「家令□〔余力〕五十五」、その裏面には「八月十一日知□□」と確認できました。文字が確認できる木簡は貴重で、長登銅山を理解する直接的な手がかりとなります。そのため、平成30（2018）年3月に記者発表を行い、発掘調査現地説明会で公開しました。さらに、令和元（2019）年に奈良文化財研究所に委託した調査で、裏面の□□部分が「廣鷗」（廣嶋）と読めると判明しました。

この木簡は、記載内容から製銅付札木簡であることがわかります。「家令」とは親王・内親王および三位以上の貴族の家（邸宅・財産・職員からなる経営体）に仕える公設職員を示し、家財管理などの家政を統括した秘書官に類した役職です。「余」は人名で渡来系氏族だと考えられます。

つまりこの木簡は、皇族ないし貴族に仕える「家令」である渡来系氏族の「余」氏に送る銅「五十五」斤（約37kg）に付けられていたものと言えます。「廣嶋」はこの木簡の記入者、もしくは銅製錬工人の名であると考えられます。「廣嶋」は長登銅山

写真



赤外線写真



訳文



基本情報

木簡番号	830
高さ	(122mm)
法量	幅 29mm
	厚み 4mm
型 式	039
調査年度	平成 29(2018) 年度
出土地点	大切 II C 区 6 T 大溝内

《訳文凡例》

----- …推定される本来の木簡の形
□ …読めない文字のうち字数の確認
できるもの
〔カ〕 …本文に置き換わるべき文字で疑
問が残るもの

「家令余」木簡（撮影：奈良文化財研究所）

跡のこれまでの木簡では見つかっておらず、初の事例となります。

家令「余」氏も長登銅山跡では初出です。この「余」氏は誰だったのでしょうか。これまでの長登銅山跡出土木簡の年代が奈良時代前半と推定されることなどから、奈良時代の歴史書『統日本紀』に見える橘諸兄の家令、余義仁ではないかと考えられます。橘諸兄は奈良時代前半（8世紀前半）に聖武天皇を補佐した官人で、当時の社会を語るうえで重要な人物です。

奈良時代前半、天平7（735）年に九州で天然痘が流行し、天平9（737）年には平城京でも大流行することになりました。平民や貴族あわせて膨大な死者が出て、政権を担っていた藤原四兄弟（武智智麻呂・房前・宇合・麻呂）が相次いで亡くなり、政治的空白が発生する事態となりました。この天然痘により日本全体の人口約500万人のうち25～35%程度、すなわち約100～150万人の人々が死去したとする推計があり、当時も疫病が猛威をふるっていたのです。

この政治的空白に対応する形で、藤原四兄弟の義兄弟（父不比等の後妻である橘三千代の子）にあたる橘諸兄（葛城王）は、朝廷から大納言に任命され、翌年には右大臣となりました。諸兄の台頭とあわせて、遣唐使として大陸に渡って18年間の留学から帰国した留学生・吉備真備や僧・玄昉が政権に顧問役のような形で参画します。2人は唐で学んだ最新の豊かな知識を武器に、諸兄政権内で発言力を強め、重用されていきます。

神亀元（724）年に即位した聖武天皇ですが、その治世は疫病の流行・各地での飢饉・

木簡（解読できず）
(撮影：奈良文化財研究所)

政治的争乱などの社会的な動搖が広がった時期でした。仏教をあつく信仰していた聖武天皇は、鎮護国家の思想に基づく政策を展開し、「国分寺建立の詔」、「大仏造立の詔」などを発します。こういった仏教政策も諸兄を筆頭とする官人の活躍によって、円滑に進められたものと考えられます。

東大寺大仏の原料銅を産出した長登銅山跡において、仏教政策を主導した諸兄との関連が推定できる「家令余」木簡が出土したことは、当時の社会を考えるうえで非常に重要な発見であったといえます。

5. 長登銅山ではたらく役人の道具 一刀筆之吏

「刀筆之吏」ということばがあります。文字を書くことを仕事とした役人を意味することばで、『史記』や『漢書』など2000年以上も前の中国の歴史書に使われています。当時の中国の役人は木簡や竹簡に筆で文字を書き、書き誤ると小刀で削って修正していました。木簡を使用していた日本の古代の役人も同様です。

今回の調査ではこのことばを想起させる遺物が出土しました。

木製の柄が付いたままで出土した鉄製刀子です。武器にするには小さいため、木簡の修正などに用いた小刀だと考えられます。また、竹製品が出土しました。よく磨かれており、筆の軸だと考えられます。刀子も竹製品も長登銅山跡では初めての出土です。

そのほか、奈良時代の食器である須恵器を硯として利用した転用硯や、「十」と墨で書かれた須恵器も出土しました。

これらは長登銅山ではたらいていた役人が使用していたものと思われます。



鉄製刀子



竹製品



転用硯・墨書土器

6. 長登銅山ではたらく人々の道具

長登銅山跡からは、銅生産に従事した人々やそれ以外の生産に従事した人々が使用した遺物が出土します。今回の調査でもそれは同じでした。

展示している土器は長登銅山ではたらく奈良時代の人々が使用したものです。発掘

調査では、出土した土器の種類や形、大きさなどから時代を判別します。また、土器は地域によって形も異なります。

青灰色の土器は須恵器と呼ばれ、奈良時代では主に食器として使用されました。赤茶色の土器は土師器と呼ばれ、奈良時代では主に調理具として使用されました。土師器の甕で調理した料理を、須恵器の食器に盛り付け食事していました。

ニホンジカの角は、加工しようとした痕が確認でき、製品にしようとしたものの、なんらかの理由で廃棄された未製品です。こういった未製品の存在は、角製品を生産する場の存在が示唆され、銅以外の製品の生産についての可能性も推定されます。

長登銅山跡からは多くの木でできた道具、木製品が出土します。今回の調査でも同様で、その一部を展示しています。

長登銅山跡では木製品は腐朽せず良好に残存しています。長登銅山跡は地下水が豊富で、地下水が木製品の纖維の中までしみこんで形を保ち、酸素を遮断して木材腐朽菌から守っているためです。発掘調査で木製品が掘り出されると、すぐに水漬けになります。そうしないと乾燥して変形し、腐朽がすすみます。

しかし、水漬けのままで展示・公開にむかず、頻繁な水換えを要します。そのため、重要な遺物は保存処理を施します。木製品を守っていた水を別の薬品に置き換えるのです。展示している木製品は、木簡を含めすべて保存処理済みです。



古代の土器・角の未製品



木製品（ヘラ）



大切II C区6T大溝内
曲物出土状況



曲物

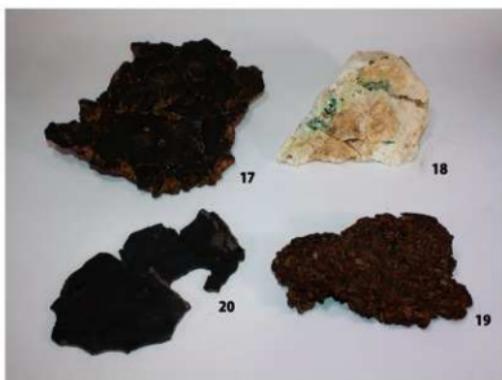
7. 製鍊関連遺物から読み解く銅生産

長登銅山跡を特徴付ける遺物に、銅生産を行う際に生じた製鍊関連遺物があります。今回の調査でも各調査区から見つかりました。

銅の生産は、採鉱→鉱石運搬→選鉱→製鍊の流れで行われます。酸化銅鉱石は採鉱によって掘り出されたもので、表面には緑色の緑青が見られます。掘り出した鉱石を運搬、選鉱した後、炉を築いて酸化銅を還元する製鍊を行います。炉壁はその炉の一部で、鞴羽口は炉に空気を送るために使用しました。鉱石に含まれる銅は10%未満で、90%以上は銅以外の不純物です。からみは不純物の塊で、製鍊で生じたものです。流状からみと塊状からみは古代の銅製鍊によるもので、板状からみは中世以降の銅製鍊によるものです。形の違いは時代による製鍊方法の変化を表しています。銅滴は銅をインゴットにする際に溢れた一部です。長登銅山で生産された銅は、鑄錢司（現代の造幣局に相当する古代の役所）などの公的機関や貴族に送られたため、銅自体が出土することは稀です。



製鍊関連遺物①



製鍊関連遺物②

8.まとめ

ご覧いただきましたように、平成27（2015）年から大切地区を中心に発掘調査を実施し、主に奈良時代から平安時代の銅生産に関連する成果が得られました。また、「家令余」木簡のように、長登銅山跡のさらなる理解につながる新発見もありました。

美祢市では今後も長登銅山跡の整備計画策定のための調査を行っていきます。この調査は発掘調査だけでなく、既往調査で出土した遺物の分析といった再検討を含みます。長登銅山文化交流館ではこの調査成果を、企画展などでいち早く紹介していきます。長登銅山文化交流館の今後の活動にご期待ください。

9. 出品リスト

No.	資料名	出土調査区	時代	世紀	備考
1	「家令余」木簡	大切II C区6 T	奈良時代	8世紀	
2	木簡	大切III C区6 T	奈良時代	8世紀	
3	鉄製刀子	大切III C区6 T	奈良時代？	8世紀？	
4	竹製品	大切II C区6 T	奈良時代？	8世紀？ 筆？	
5	須恵器杯蓋	大切II C区6 T	奈良時代	8世紀	転用硯
6	須恵器高台付杯	大切II C区6 T	奈良時代	8世紀	転用硯
7	須恵器高台付杯	大切II C区6 T	奈良時代	8世紀	「十」墨書
8	須恵器杯蓋	大切II C区6 T	奈良時代	8世紀	
9	土師器甕	大切II C区6 T	奈良時代	8世紀	企釣型
10	角の木製品	大切II C区6 T	奈良時代？	8世紀？	ニホンジカ
11	ヘラ	大切II C区6 T	奈良時代？	8世紀？	
12	曲物	大切II C区6 T	奈良時代？	8世紀？	
13	炉壁	大切II C区6 T	奈良時代？	8世紀？	風口有
14	鞆羽口	大切IV B区2 T	平安時代	9~10世紀	
15	鉱石	大切II D区3 T	奈良時代	8世紀	
16	銅滴	大切III D区5 T	奈良時代？	8世紀？	
17	流状からみ	大切II D区3 T	奈良・平安時代	8・9世紀	
18	鉱石	大切III C区5 T			
19	塊状からみ	大切II D区3 T	奈良・平安時代	8・9世紀	
20	板状からみ	大切III C区5 T	中世以降	15世紀以降	

10. 参考文献

- 池田善文『日本の遺跡 49 長登銅山跡』同成社 2015 年
佐藤 信「長門長登銅山と大仏造立」
（『出土史料の古代史』東京大学出版会）2002 年
竹内 亮「長登銅山跡出土「家令余」木簡」（『日本歴史』860）2020 年
竹内 亮「日本古代の銅生産と流通」（『考古学研究』66-4）2020 年
中村順昭『人物叢書 橋諸兄』吉川弘文館 2019 年
橋本義則「銅の生産・消費の現場と木簡」（平川南・沖森卓也・栄原永遠男・
中山章編『文字と古代日本 3 流通と文字』吉川弘文館）2005 年
美東町教育委員会編『美東町文化財調査報告第 3 集 長登銅山跡 I』1990 年
美東町教育委員会編『美東町文化財調査報告第 5 集 長登銅山跡 II』1993 年
美東町教育委員会編『美東町文化財調査報告第 8 集 長登銅山跡 III』1998 年
美東町教育委員会編『長登銅山跡出土木簡『古代の銅生産シンポジュウム in 長登』
木簡解説図録』2001 年
美東町編『美東町史 改訂版』2004 年
美祢市教育委員会編『国指定史跡長登銅山跡保存管理計画策定報告書』2012 年
美祢市教育委員会編『美祢市文化財調査報告第 1 集 長登銅山跡 IV 平成 27 ~ 30
年度調査報告書』2020 年
八木 充『日本古代出土木簡の研究』塙書房 2009 年
山根謙二「山口・長登銅山跡」（『木簡研究』41）2019 年
山根謙二「長登銅山跡の調査」（『2019 年度九州考古学会夏季大会（山口大会）
古代の山口 周防鉄錢司・長門鉄錢所・長登銅山と周防国府（発表
要旨集）』）2019 年



長登銅山文化交流館第 12 回企画展
国指定史跡長登銅山跡調査速報
—解説成功！木簡から新たな発見！— 展示解説

発行日 令和3（2021）年 2月 16 日
編集・発行 美祢市長登銅山文化交流館
美祢市教育委員会事務局文化財保護課